# 天うつ浪　第一

## 其一

秋は海樓の垂簾に動きて、ばつと吹き來る沖の風は、夕日の餘光美はしきが中に、無限の爽涼の氣を齎らせば、白帆明るき遠方の船の數々も、鉛色なして漫々たる潮の果に却つて物淋しう見え渡りつ、竹芝の浦の浪靜かに、增上寺の鐘聲に暮れ行かんとす。

此の夕此の時、『見はらし』の樓上の一室に、貸し浴衣の胸元ゆたかにくつろげて、醉に嘯く大胡坐、たゞ秋の飲酒に宜しきを知つて其の他を知らぬ面構へきびくと、あはれも絲瓜もあ